



紀州にんげん風土記

神坂次郎

和 歌山県は古代、県域の北部を紀ノ国、南部を熊野ノ国とよんでいたように、紀北と紀南では、あらゆる点で対照的である。雪も多く、一月の平均気温が氷点下にさがる高野山と、冬なお

菜の花が咲く南国的な熊野地方と、古くから畿内有数の豊饒な穀倉地帯紀ノ川沃野に住み、京阪神の影響を強くうけ、上方商人的な気風をもっている紀北人と、山と海のあいだに孤立し、海の彼方に

新しい活路を求めるといかに紀南人とは、思考法でさえ異なっている。



「太地浦捕鯨絵巻」(太地町立くじらの博物館所蔵) 1677(延宝5)年に太地で開発された網捕り捕鯨法でザトウクジラを捕獲している様子を描いている。網にクジラを絡め捕ってから鉞で突きとるので、捕獲効率が飛躍的に高まった。



Jiro Kosaka

本 州の最南端にある紀伊半島は、その殆どが山地で、耕地は県域のわずか一割。ここにあるのは重畳たる山のたなわりと際涯を知らぬ黒潮の海ばかりである。その、海に生きた男たちのあいだで紀州漁法が発達したのは、戦国末期から近世初頭にかけてであった。おりから城下町など諸国都市の拡大と農業生産の発

達を誘因した漁獲物(食糧魚と魚肥)の社会的需要が急激に拡大する。この時期、諸国の漁民に先がけて、すでに高度な各種の漁労技術を掴んでいた紀州の漁夫たちは、東は相模、房総、常陸から東北へ、西は四国、瀬戸内、中国、九州、五島列島にいたるまで魚を求めて旅漁に出かけていった。先進的なこれらの漁夫たちの足跡は、いまも諸国の浦々に色濃く残されている。

戦国末期の弘治年間、のち近世最大の干鰯生産地帯になる九十九里浜に鰯地引網漁法を伝えた紀州人、西宮久助。慶長十一年、従来の鉞突捕鯨から網取漁法を考案して熊野太地の鯨方の名を天下に鳴りひびかせた和田・太地一族の男たち。寛永の頃、銚子に近い外川に開発した八つ手網鰯漁法を伝えた崎山次郎右衛門。元和年間、土佐国に赴き鰯釣漁法の祖となった印南の甚太郎。そしてその子の二代目甚太郎もまた土佐に鰯節の燻乾、つまり煙りでいぶし鰯節独自の風味を加えた製法を伝えた土佐鰯節の祖となっている。

太平洋に開かれた紀州・和歌山。その紀南に住む人たちは積極的に遠洋に乗り出し、各地に漁法を伝えた。



関 東への産業開発、進出といえ、日本人が年間一人あ

《現実の世界が狭いから、人びとは逆に、観念的に広く考えがち》
その風土のゆえに進取の気風

をつくりあげ、理想主義者、反体制者を生み出したと紀南人、佐藤春夫は語る。



法燈国師覚心が開山した興国寺(和歌山県由良町)

たり五升(九リットル)消費するという醤油もその一つであろう。鎌倉の頃、由良、興国寺の法燈国師覚心が宋(中国)径山興聖寺でまなんだ味噌醸造の過程で発見した醤油は隣村の湯浅に伝えられ、以来この湯浅醤油は日本の味を代表する「醤油」の起源となる。そして後年、湯浅を出て大消費地の江戸に近い銚子で醤油をつくりはじめた濱口儀兵衛の登場によって、銚子は日本の醤油醸造のメッカとなる。

こ うして歴史のなかに紀州発祥の経緯を眺めてみると、その数は意外に多い。パナマ運河より百八十三年も前に開門式

運河を実現させた鬼才、井沢弥惣兵衛。種子島から根来寺にもたらされ近世の幕をあげた鉄砲。世界最初の麻酔薬による手術を成功させた華岡青洲。わが国初の種痘、国産の牛化人痘苗(ワクチン)の実験に成功した小山蓬洲。国民皆兵の前身となった北畠道龍ひきいる日本共和軍隊。陸奥宗光が和歌山城下に興した日本初の西洋靴伝習所(製靴工場)。そして明治新政府の原型となった津田田の官(藩)制の改革・郡県制度の確立など、和歌山県人が日本史に与えた影響は大きい。

神坂次郎(こうさか・じろう)
和歌山県生まれ。長谷川伸賞、日本文藝大賞、南方熊楠賞を受賞。1992年、皇太子殿下に自著「熊野御幸」を御進講。代表作に「元禄御量奉行の日記」「縛られた巨人 南方熊楠の生涯」特攻兵の記録「今日われ生きてあり」など。著書は《国会図書館所蔵・神坂次郎著作本・百四十冊》。1998年、(社)日本ペンクラブ理事。

Profile